

13-3 ヤマトアザミテントウのアザミ適合性

○小路晋作・山下水緒・中村浩二（金沢大・理・生態）

アザミ属 *Cirsium* を主な食草とするヤマトアザミテントウ *Epilachna niponica*（以下ヤマトと略す）は、その近縁種と同様、地域集団間および地域集団内に、形態と食性の変異が大きいため、種分化の研究材料として注目を集めている。一方、日本列島のアザミ属も複雑に分化しており、多数の近縁種が同所的に分布し、雑種ができやすく、形態、倍数性などの変異が多いので、分類は困難である。このこともあってか、ヤマトのアザミに対する食草適合性についてはほとんど研究されていない。

演者らは1994年に、京都府から石川県にかけて分布するアザミの中から、ハクサンアザミ、カガノアザミ（2倍体種および4倍体種）、ホッコクアザミを選び、シャーレ内に各種をともに入れて、室内実験によって、それらに対するヤマト集団（石川県湯涌産および京都府芦生産）の選好性を調べた。実験開始2時間後の摂食面積のみならず、その間の摂食行動を連続観察して比較した結果、次のことが明らかになった。

1. 湯涌のヤマト集団と、芦生のヤマト集団では、アザミ選好順位がことなる。
2. 選好性の違いは、定位、定着の過程ではなく、摂食開始で初めてあらわれる。
3. 2倍体カガノアザミ（金沢市湯涌産）のエタノール+酢酸エチル抽出液に、摂食忌避作用がある。